

Lemon Ginger

冷たくひやした井戸水に、レモンの搾り汁と砂糖、それに少しの重曹を入れてよく混ぜる。やがて炭酸の泡がふつふつ沸いてくるから、少しずつ味見をしながら砂糖とレモンを少しずつ足して好みの味を作る。

アリスの作るレモンソーダは少し酸味が強い。魔理沙としてはもう少し甘い方が好きだ。以前にそう告げたことをアリスはちゃんと覚えていてくれて、二つ並んだグラスのうち、片方だけ多めに砂糖を足しておいてくれる。木のさじでグラスをかこんかこんと混ぜる音がとても優しい。

テーブルにあごを載せてもたれかかりながら、魔理沙は小さく渦を巻く透明な飲み物をじっと見つめている。ほっそりとした指先をまとわせて、無垢の白樫で出来たスプーンが二つのグラスをゆっくり均等にかき混ぜている。

「なあ、混ぜすぎじゃないか？」
待ちきれなくなつて魔理沙が言う。

「重曹はなかなか水に溶けないのよ。苦いの嫌でしょう？」
かすかに笑いで、アリスは優しく答える。自分に姉がいたらこんな風だろうか、と魔理沙はとりとめもなく思う。

「そうだけどさあ。そんなにまだるっこしいこととしてたら、ぬるくなっちゃうぜ」

「冷蔵庫に氷があるわ。大丈夫」

あわてることなくアリスは答える。その行き届いた親切心はどこまでも正しい。

準備はしっかりしていて、優しく正しくて理的。ひとりっ子だから実感はないものの、こんな姉がいたら自慢だろうなと魔理沙はぼんやり思う。

小さくアリスが吐息だけで笑う。

「そんなに待ちきれないなんて、よっぽど喉が渴いたのね」
「まあな。今日は夏みたい暑いからな」

窓の外を見る。雲一つ無く晴れてぽかぽかと陽気な太陽を浴びて、庭の草木が輝いてみえる。あまりにも明るいせいで、室内に視線をやると暗闇の中に緑色の残像が残るぐらいだ。
「ショウガ入れる？」

「うん」

蜂蜜につけたショウガの薄切りを一切れずつ、グラスへ入れる。ゆらゆら表面で揺れてなかなか底に沈んでいかない。でもそれでいい。飲み口に近ければ近いほど、爽やかなジンジャーの香りが鼻先に漂ってそれが心地よいのを魔理沙は知っている。

差し向かいに並べられたコーンスターは二枚。ぱりっこのりの効いた白いテーブルクロスの上に置かれる。中心には銀で出来た小さなアイスペールが置かれる。冷やかに氷をたた

えて、微かにその表面は露に濡れている。

トングを持ってアリスは尋ねる。

「氷は二つ？」

「うん。おっきいやつを頼むぜ」

魔理沙がそう答えると、人形遣いはかすかに眉をひそめた。

「お腹壊さないようにゆっくり飲むのよ」

「わかってるわかってる」

気安く答える白黒魔法使いに、アリスは小さくため息をついた。

「あなたはそんな風に言うけれど、今はまだ3月なんだから。明日からは寒いかもしれないのよ」

「いいからいいから。今日がよけりやそれでいいぜ」

「まったく……人間らしいといえれば人間らしいけれど」

「ほらほら、しゃべってたら氷が溶けちゃうぜ。はやくおやつにしようぜ！」

そう言っただけで立ち上がる。台所へ向かう。

「ビスケットあったよな。たしか真ん中の棚の上から三番目に」

「なんであなたがうちの食料庫の配置覚えてるのよ」

「こないだお前が風邪引いて、わたしが看病しただろ。その時にいっぱい家捜しさせてもらったぜ！」

「……看病、ね」

アリスは思わせぶりにくすくす笑った。魔理沙は不思議に思っただけで振り返る。

「何がおかしいんだよ」

「わたしの手を握って『やだ、アリスが死んだらやだあつ！』って泣きそうな顔してたなあって思い出しちゃって」

「お、お前、起きてたのかよ！」

「あんな風に強く握られたら誰だって起きるわよ」
「……………」

せっかく一本取ったと思ったのに、すぐに覆される。いつものことと言えばそうなのだが、やはり恥ずかしくて悔しい。

「う、あ、えっと、うんと」

恥ずかしさで熱くなった頭で一生懸命考える。何か言い返してやらないと。負けっぱなしはくやしすぎる。

「お、お前の寝顔はすごく可愛かったぞ」

ようやく思いついたのはそれぐらいだった。どうだ、思っただけで胸を張って相手の目を見る。

「あら、そう」

にっこりと大人の微笑を返される。まったく効いていないみたいだった。

「さ、頂きましょう。氷が溶けて薄くなってしまから」

すでに帰ってこないといけないから遠くまでは行けないわ」

「大丈夫だって。幻想郷最速は伊達じゃないってところを見せてやるぜ」

魔理沙はそう言うなり、勢いよくグラスの中身を飲み干した。口の中に残ったショウガをべっとグラスの底へ吐き捨てる。

「さあ、さあ、早く行こうぜ。日が暮れる前にさ」

「ああもう。しょうがないわね。上海、蓬莱。支度をしなさい」

「シヤハートー」

「シヤー！」

人形達の返事は元気だ。久々のお出かけでうきうきしているように見える。

と、くいくいとアリスの袖を引くものがある。名前を呼ばれなかったオルレアン人形だった。

「なあに？ 京とあなたはお留守番よ」

「ズン、ズン……」

ががーんとオルレアン人形の顔に衝撃が浮かぶように見える。表情パーツは無いはずだが、リアクションだけで何故かそう見える。

「この間、暖炉当番なのに居眠りしたのはだあれ？」

「うーん」

少しだけアリスは逡巡した。

「いいけれど、もうだいたいぶ出かけるには遅いわよ。日が沈む

「カハアハ……カハハ……カハハハ」

「ズーンとうつつむいて凹んでいる。よしよしとアリスが頭を撫でてやる。」

「大丈夫。おみやげは用意するから。魔理沙が」

「わたしかよ！」

思わずツツコミが入った。

「連れ出すからには責任取ってよね」

そう言っ、アリスはいたずらっぽく笑む。その笑顔を見ていると、魔理沙はまんざらでもない気持ちになる。帰りに人間の里に寄ってケーキの一つでも買ってやるうという気分だ。

……あれ、だまされてる？ いやいやそんな。アリスの可愛い笑顔が見られるならそれでいいじゃないか。うん。たとえだまされてたって、アリスが可愛ければそれでいい。出来ればあんまりだまさないでいてくれると嬉しいけど。というか、これって明らかに一人芝居だよな。まだ自律人形って出てないはずだし。

「何をぶつぶつ言っているの。行くわよ」

「え、あ」

はつと我に返る。振り向くと、玄関でアリスは待っていた。肩から下げているカバンは少し膨らんでいた。おやつか何か

意識を集中させて強く地面を蹴る。ふわっと宙へ。

腰に回された手にきゅっと力が込められる。どきゅとして

集中が乱れそうになる。

「うおおっ！」

少女らしからぬ声を出して、どうにか平静を保つ。気合いを入れてまっすぐ前を見る。太陽が眩しい。

「負けるかあっつっ！」

霧雨魔理沙は今日も見えない敵——己の本能と戦っている。

上空。

風切り音を立てて、心地よいドライブを楽しむ。揺れすぎないようにいつもより注意深く飛んでいる。自分一人ならどれだけがたがたしてもいいのだけれど、今日はアリスが一緒だから、出来るだけ気遣ってやる。

二人でただ黙って一緒にいるのは、ほとんど初めてのこともかもしれない。いつもは大抵二人でいるとおしゃべりが始まってしまって、きやいきやい笑ってばかりいる。

こんな風に真剣に静かにしているなんて、少し新鮮な気持ちだ。アリスはどんな顔をしているだろうか。後ろを振り返りたい気持ちを抑える。前見て運転しなさいよ、そんな風に

だろう。

ほうきと帽子を取って、追いかける。二人で玄関のデスクに立つ。

出来るだけそれとなく、アリスの手を握る。さりげなさを装ったのに、少しだけ緊張してしまう。手に汗かいていないか心配になってしまいうぐらいに。

ほうきにまたがって、振り向かずに言う。なんだか意識してしまっ、アリスの顔は見られなかった。

「う、後ろ乗れよ」

「うん」

アリスは淑やかに横座りで魔理沙の後ろへ腰掛けた。上海、蓬莱はそれぞれその膝に座る。

「も、もつと……」

ちゃんと座らないと落ちるぞ、と言おうとした瞬間。

きゅっと右手を魔理沙の腰に回してきた。二人の身体が密着する。体温を服越しに少しだけ感じる。

「あ、」

「ほら、どうしたの。行くわよ」

「う、うん」

顔が熱くて、胸がどきどきして、まともな返事がかえせなかった。深呼吸を何度かしてなんとかして平常心を取り戻す。

きまじめなセリフを想像して、魔理沙は唇だけで笑った。

それでも笑っている気配が伝わってしまったのだろう。ちやんと飛べと言うように、腰に回された力が強くなる。魔理沙は笑みを消して小さくうなずく。腕の力がゆるむ。そんな言葉にならないコミュニケーションが、つながっている証拠のような気がして嬉しかった。

前方に雁の群れを見つけた。少しだけスピードを増して追いかける。別にいじめてやろうと思っただけじゃない。ただ、一緒に飛ぶ道連れが嬉しかっただけだ。

「おおい、お前たち、どこに行くんだ」

返事がないことを承知で呼びかける。きつと冬が終わってしまうから自分たちの故郷に帰るのだろう。

澄んだ緑色の目をした鳥たちはよそ見はしない。ただ前を向いて自分たちの飛びたい方へまっすぐに飛ぶ。鳴きもしない。ただ真剣に家路を急ぐだけ。

それでも隣に並んで飛んでいると、いろいろなことが分かる。後ろの一羽だけ少し羽根を動かすリズムが遅いこと。先頭を飛ぶリーダーが時々いららしたように鳴くこと。右舷前方の子供の頭の毛が抜けかかって、今にも飛んでいってしまいいそうなのかなか吹き飛ばされぬこと。左舷後方の二羽が時々ふざけあっておしゃべりでもするようにくちばし

をひくひく震わせていること。

どれもみんな覚えておこうと魔理沙は思った。

覚えておいて、あとでアリスに話してやろう。そんなところまで見ていたの、気づかなかったわ、なんて驚いてくれるかもしれない。それとも、わたしも気づいてたわ、と言って魔理沙でさえ思いも寄らないような色々なことを教えてくれるかもしれない。

なんだか無性にアリスと話したくなった。飛んでいる間は風の音がうるさくて会話が出来ない。自分からドライブに誘ったくせに、すぐに降りてしまったら甲斐性なしといってなじられるだろうか。どうだろう。

気になってちらりと後ろを振り返ろうとする。ぎゅっと腰を強く抱かれる。怒られるような気がして、魔理沙はあわてて前を向いた。

と、耳朶へ暖かい吐息。その温度にとくんと心臓が跳ねる。

「そろそろ寒くなって来たわね。休憩にしない？」

心を読んだようなその一言にほっとする。大きくうなずいて、返事の代わりにする。降りるのに手頃な崖の上を探して、ゆっくり降り立つ。

沈みかけた夕陽がよく見える。赤い太陽は昼間天上にあるのとはまったく別のものみたいに大きく見えた。

ただ二人で並んで夕暮れの空を見ていた。金色に燃え上がる山の端とゆらめきつつ覆い被さってくる夜闇の紫紺とが混ざり合って、巧みな釣り合いを保っている。それが刻一刻と移り変わってゆくさまは見ていて飽きなかった。

さっきまではアリスの声が届かなくてたまらなかったのに、圧倒的な景色に見とれてしまつてうまく話せなかった。ため息をつくようにしてアリスが言った。

「きれいね」
「……うん」

そう言うのが精一杯で、せめてもう少し何か伝えたくて、手をおずおずと伸ばした。ちよつとだけ届かなくて、空振り

そうになるのを、アリスの手が少し伸びて、受け取ってくれた。飛んでいた時の風の冷たさに、互いの手はかじかんで冷えていて、それすら同じ体温であることで胸がどきどきして止まなかった。

互いに手と手が触れ合っているだけなのに、心同士が直接触れ合っているみたいだな、そんなくすぐったいような心地がして、幸せだった。

「ドライブ、楽しかったわ。ありがとう」

アリスが言った。魔理沙にはひどく不吉な言葉のように聞こえた。

「おいおい。まだ終わってないぜ」

「そうだけど……今の内に言っておかないかと思って」

「えっ」

魔理沙がどういふことだと聞き返そうと思った瞬間。

アリスが後ろを指さす。

振り返る。北東の方角、恐ろしいほどの暗雲が見える。渦を巻き、内側に稲光を潜ませて天上を覆い尽くそうとする。深い青黒色をして春の陽を脅かさんとする魔物のように見えた。

「嵐が来てるわ。降り始めるより先に帰らないといけない」

「……嵐」

刹那、魔理沙の脳裏に先ほど会った雁の群れたちの姿が浮かんだ。後ろの方の一羽が怪我でもしたかのように、リズムが遅れてしまっていたことも。若い鳥たちがはしゃぐみたいにして転がるように飛んでいたの。

「この時期には多いの。雲の中で春の陽気と冬の寒気が弾幕ごっこでもしてるのかしらね」

くすりと笑ってアリスは言ったが、魔理沙の耳にはほとんど聞こえてはいなかった。

胸の中がそわそわと鳴る。

あいつらは野生の鳥だ。毎年ここいらに来ているなら、春

の嵐に遭うことなんてざらにあることだろう。自分に何か出来るなんて、思わない方が良い。故郷へは自分の羽根で飛んでいくしかない。

それでも知っていて、見殺しにするのか？

気が付いたら、口走っていた。

「悪い。用事を思い出した」

言うなり、ほうきへまたがる。

「アリスは先に帰ってて」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ」

声を掛けられるが、待たずに飛び立つ。緊張のせいとか、普段よりわずかに身体が重い。ぐんぐん高度を上げつつ、とりあえず謝る。

「ホント、ごめんな。こんなところで終わりにしちゃって。

今度必ず埋め合わせはするから！」

「な、何よ。いいわよ、そんなの。それより……」

アリスの言いかけた言葉は、魔理沙の耳には届かなかった。

全ての魔力をほうきへ集中させる。

全速力で飛翔。音速を超えそうなほどの豪速で雁たちの行った方を追いかける。高度は十分なはずなのに衝撃波で森の木々が波打つほどのスピード。冷え切ったままの耳が千切れ飛びそうにきんきん痛む。かじかんだ手では満足にほうきが

握れない。脚の間で挟み込んでどうにか振り落とされないうるぐらいだ。

でも、そんなことに構ってはいられないんだ。

「……あれだ」

前方一時の死角に、黒い点がいくつか飛んでいる。群れの大きさは先ほどあった時とほとんど変わらないのが分かって、少し安心した。

それもつかの間。

ぼつりと魔理沙の頬へ落ちてくるものがある。はっと見上げるとほぼ同時に降り始める。すぐに、ごうごうと吹きすさぶ横殴りの雨に変わった。

雁の群れに追いすがる。真横から、リーダーと思わしき一羽に向けて魔理沙は懸命に叫んだ。

「止まれ、休め！ この嵐の中を飛び続けるなんて無茶はやめる！」

彼らはただ前に進むだけだ。声は、屈くわけがなかった。

全力で群れをかき乱すように突進する。わあつと乱れる雁の群れは、しかし飛ぶのを止めない。散っては集い、離れては寄る。どれだけ激しくかき乱されても、先を指して飛び続けるうちに、仲間の元へ寄り添っていく。

どれだけよれよれになって、力を失いかけても、前を指

「弾幕はッ！」

そこにある、渦巻く雨雲、元凶の積乱雲。

標的は春の嵐そのものだ。

「パワーだぜ!!」

落ちてくる雨を丸ごと相殺する一撃を放つ。

霧雨魔理沙、生涯最大級のマスターズパーク。

雷ごと打ち砕いて、春の嵐の雲をかき乱して消失させてしまふほどの真つ白な極太レーザービーム。

みしり、音がする。帆船のマストが折れるような。

技の反動に、ほうきの柄が耐えきれなかったのだ。

はっと柄をつかみにかかる。後ろのほうきの尾までは気が回らない。

まっすぐに雲の切れ間から落ちてくる星の光と同じように、白黒魔法使いは森の中へ落ちていった。

雲散霧消した春の嵐を超越して、雁たちはただまっすぐに故郷へ向けて飛んでいくばかりだった。人間のことなど知りはない。ただ雁の道へ急いでいた。

全身を駆けめぐる激痛のせいで、魔理沙は目を覚ました。

「いっ……っ……っ……」

して故郷を目指して飛んでいく。雨に打たれてまばたき一つしない。強い風に吹かれて進路が揺らいだとしても、いつしかそれさえも乗り越えて元の方向へ戻ろうとする。力無くとも、信念だけで飛ぼうとする。

魔理沙の腹の中でふつふつと何かこみ上げてくる。

苛立ち。怒り。無力さ。そんなものじゃない。そんな程度の言葉で表されるようなものじゃない。物言わぬ雁たちの信念。思い。その羽ばたきの力強さをすぐ傍で見ているだけで

魔理沙の心の中に熱い何かがこみ上げてくる。

家路があるのなら、受け入れてくれる故郷があるのなら、無事にちゃんと帰してやらなくちゃいけない。

灰緑色に煙る森の木々が風に会って波打っている。大しけに会う船団のように、鳥たちは揺れる。航路がゆがむ。それでも前へ進む。故郷へ向かうために。

天空へ向けて、雨雲へ向けて。こみ上げてくる自分の気持ちを声に出す。

「ちまちま細かい雨降らしてんじやねえよ！」

気が付いたら、ほうきの柄から手を放していた。脚だけでバランスをとりながら、両手で真上へミニ八卦炉を構える。

その先は虚空？

否――

うめきながらどうにか身を起こす。森の木の枝がクツションになったのだろうか。足も手も切り傷だらけではあるけれど、奇跡的に骨折などはなさそうだ。

手元にはほうきの柄だけ。尻尾の方はどれだけあたりを見回しても見つからない。このままでは飛んで帰れない。自分がどこに落ちたのかさえ分からないのだ。

「……どうしよう」

うっそうと繁る森の中、頭上を見上げる。覆い被さる木の葉がざわりと揺れる。もうとつぷりと日は暮れてしまっている。木々の合間、はるかに高いところで星が瞬いている。

先刻の嵐など嘘みたいに空は晴れていて、ほっと息をつく。鳥たちが無事であればそれだけで報われたような気がする。

何だか立ち上がる気力もなくて、ごろりと横になる。森の中はひどく静かで、しみりした気持ちになった。道も分らないのに夜動き回る気にはなれない。ただうずくまって日が昇るのを待つことにした。服は雨で濡れて張り付いていて、泥だらけ。全身が冷え切ってしまった。

昼の間は暖かかったけれど、夜の冷え込みはその分ひどい。

ミニ八卦炉に魔力を流し込んで、どうにか温もりを取ろうとする。とろ火でどうにか手だけは温まったけれど、スカートからはみ出した脚や小さくて丸い肩から徐々に夜気は忍び寄

つてくる。ぶるりと震えて身を縮こまらせる。それでも湿った地面から感じる冷気が耐え難くて、身を起こす。膝を抱えてほうっと息を吐いた。

ひどく心細い気分になる。世界でひとりだけ取り残されたような、不意にそんな気持ちになつて、小さく首を横に振つた。それでも弱気が心のひだに入り込んでくる。

一人きりで暗い森の中でしゃがみ込んでみると、どうしてもそんな気持ちになる。孤独、ひとり、さみしき。道連れのない旅。うち捨てられた子供は森の中でひとりぼっち膝をかかえて、うつむいている。泣くほど幼くはなかつたけれど、それはひとりであることに何も感じないということでは決してない。

もつと楽しいことを考えようとして、不意に好きなひとのことが浮かぶ。

アリスは、どうしているだろう。

置いてきてしまったけれど、ちゃんと飛んで家に帰つたかどうか。嵐は消しておいたから、雨で濡れているということはないだろうけれど、遠いところまで連れ出してしまったから道に迷つたりしていないといい。迷子は自分だけで十分だ。そこまで考えて、小さくため息をついた。

何をやってるんだろう、わたしは。

ぴよん、と藪から飛び出してきたのは、赤いリボンに金髪のかつら。青いガラスのドールアイ。小作りな蓬莱人形の顔は無表情でこつちを見る。ちきちきちきとねじを巻くような音がして、ぴこーんと目が少しだけ光つた。ちよつと怖い。

くるりと後ろを向いて、人形は叫んだ。

「ゼー！ ツァ、ツァニ、カバ、カバニ！」

「くっ」

驚いて間拔けな声が出る。

「ああ、やつと見つけた。ホント探したんだから」

低木をかき分けて、懐かしい声をする。

「上海と蓬莱がいてくれなきや、あなた今頃飢え死にしていたよ。落ちた場所の見当さえ付かないんだから」

アリスがいた。

その肩の上で、真っ黒に汚れた上海人形が無表情のままVサインをした。空いた側の手には勲章みたいに折れたほうきの尾の方を持っている。まっすぐつやつやだった金色のロングヘアーに、ほうきの小枝が何本か絡まって飛び跳ねていた。「暴走する魔法使いのほうきに全力でしがみついて、ホントに可哀想だったんだから」

ねえ、とうなずきあうみたいにして、アリスは肩の上に載せた上海人形と見つめ合う。こくこくと横で腕組みしてうな

せつかくのデートだったのに。はじめてのドライブだったのに。自分でだいなしにして。帰ったらちゃんと埋め合わせしなくちゃ。何をしたら喜ぶだろう。やつぱり女の子だし、甘いモノだろうか。アリスは洋食派だからケーキとかシュークリームとか、そういうのが似合うと思う。でも都会派の口に合うようなケーキ屋は高いんだろうな。ちゃんと調べて美味しいところのを買って行かなくちゃ。

そこまで考えて何故だか、アリスがもう会ってくれなかったらどうしよう、なんて悪い考えが脳裏に忍び寄る。ふるふると頭を振って、その考えを追い出そうとする。でも無理だ。嫌な想像ばかりが頭の中をよぎっていく。デート中に相手をほっぽりだして、それで二回目があるなんて、確かに虫の良すぎる話だろう。頭の中でアリスの声まで再生される。何考えてるのか分からない、あなたなんかもう知らない、二度と会いたくない、だいきらい。

「うわあああっつ！」

思わず自分の声でぱつちりと目が覚めてしまった。

ふと、遠くでがざりと音がした。びくりとして、起きあがる。何か動物だろうか。八卦炉の火を消して辺りを警戒する。嫌な汗が全身を濡らす。と。

ずいている蓬莱人形。

魔理沙は一気に全身の力が抜けていくのを感じた。ぺたんとして地面にへたりこむ。

「ああもう、泥だらけのところ座らないの」

仕方ないわねと苦笑して、魔理沙の頭をそつと撫でる。

「迎えに来たわ。帰りましょう」

こつくりとうなずいた瞬間に気持ちがゆるんでしまつて、魔理沙は一滴だけ涙を流した。そつと白いハンケチでぬぐつて、アリスは何も言わないでいてくれた。

魔理沙がほうきの折れた所をツタでぐるぐる縛り付けて直している間、アリスが沢できれいな水を汲んできてくれた。アリスのかばんの中からは色々なものが出てくる。いつでもどこでも英国式の由緒正しいお茶が飲めるようになっていく。

銀色の大きなマグカップをミニ八卦炉の上にかけてことごと沸かして、レモンの薄切りと茶葉と砂糖、それにシヨウガの蜂蜜漬けを千切りに入れて入れる。仕上げに風味付けのブランドーをひとたらし。カップが一つしかないのは、ご愛敬だけれど、代わる代わるに飲めばその事実だけで身体がぼつと温まる。

ブランドーが効きすぎているのかもしれない。

そんなことを魔理沙は思う。酒には別に弱くはないけれど、なんだか少しだけ酔ったみたいだ。身体がふわふわ羽根でも生えて飛んでいきそうに幸せな気持ちがある。火影に木々が少しづつ揺れて、踊っているみたいに見える。一人きりなら怖くてしかたのないだろう風景が、二人だとなぜか心温まる光景のように見えた。目と目が合うとそれだけで頬がぼうつと赤く熱くなって、心の底から微笑が浮かんでくる。

「なんであんな無茶したのよ」

と、アリスが尋ねる。雁を追いかけて行った時のことだ。見捨てていくことだって出来たはずだ。お互いに旅の道連れで、別れていった後のことで、鳥たちだってまさか助けを予想してもいなかっただろうし、感謝の様子だって見せなかった。彼らにとっては、魔理沙も嵐もほとんど見分けが付かなかったに違いない。

アリスの言わんとしていることは、魔理沙には分かった。自分でも少しどうかしていると思う。

それでも彼らを助けずにはいらなかった理由が、魔理沙にはある。

「うまく言葉にならないけど、なんていうか、さ」

こくりと、喉を鳴らして魔理沙は一息つく。

アリスの指先からすり抜けて、魔理沙はじつと顔を近づける。そうやって見ないと、本当は人形なんじゃないかって思ってしまうぐらいに美しかった。

おずおず聞いた。

「なんでお前が泣いてるんだよ」

「バカ魔理沙。子供のくせに、こういうとき、あんたが泣かないから代わりに泣いてるの。うるさい、バカ、ばか」

いつもは使わない「あんた」なんて乱暴な言い方をして、アリスはまたぐいぐい魔理沙のほっぺたを引っ張る。力の加減がなくて、じんじんしびれてきた。

「あんたは捨てられたわけじゃないの。あんたはわたしの家にいればいいの」

アリスは少しだけしゃくりあげるようにして、話す。まるで自分が親から勘当されたみたいに、強情を張っている。まるで魔理沙の胸の内を代弁するみたいに、アリスはただがむしやりに語った。

「あんたにだって帰る場所はあるの。弾丸みたいに飛び出していったって、流れ星みたいに消えてしまいうさだだって、いっただって、帰ってきていいんだから。いっただって、ここに、わたしのところに帰ってくるんだから」

涙声のアリスを、魔理沙はこれ以上見ていられなかった。

アリスは分かってくれるだろうか。どういえばこの気持ち伝わるのかよく分からないけれど、アリスにはちゃんと分かって欲しいような気がして、ただ素直な気持ちを口にした。「あいつらには帰る場所があるのなら、ちゃんと帰してやんなくちやって、思っ」

そうつぶやいた魔理沙の顔を、アリスはぼかんと口を開けて見ていた。それからぎゅっと拳を握りしめて、木の幹にもたれかかっている魔理沙の横にしゃがみ込んだ。

「……バカじゃないの」

きゅっとほっぺたをつねられる。戸惑って、魔理沙はアリスの顔を見つめた。

「あいひゅ……？」

「まさか、自分には帰るところがないなんて思っていないよね」ぎゅっと横に引き絞った唇。端正な顔立ちの中で、そこだけがいつもと違っていた。

「そういうこと言ったら本気で殴るから。パーじゃなくてグーだから、ホントに」

そう言うなり、アリスはぼろぼろと涙を流し始めた。アリスは泣くときに表情を少しもゆがめないから、その泣き顔は本当にきれいだ。人形の目から透明な宝石が落ちていくみたいに見える。

ぺろつと頬を舐めて、涙を拭き取ってやる。

まるで得意がっている少年のような笑顔を作って、言っただった。

「お前は、考えすぎなんだよ」

「あなたが考えすぎなんだよ」

そう言っ、ようやくアリスは自分のハンケチで涙を拭いた。

「なによ、ひとのこと泣かして。責任取りなさいよ」

「おいおい、アリスが勝手に泣いてるんじゃないか」

「うっさい。魔理沙のバカ」

ばかりと肩の上を叩かれる。その甘い拳が何か物語っているようで、魔理沙は目をつぶってそれを受けた。とくとくと心臓が鳴っているのと同じリズムで、アリスの手が温かい。

「別に、ひとりだなんて思っ」

ぎゅっとその手を握って、止めてやる。自分の頬にすり寄せて、暖めてやる。そっとささやいてやる。

「わたしの家はもうアリスのところしか無いんだって、それぐらいには思っ」

「……やっぱバカでしょ、魔理沙」

「ひどいなあ、アリスは」

そう言っ、鼻先をすり寄せる。アリスは上目遣いでら

んでいる。魔理沙はそれを受け止めてにいつと笑う。

アリスのうつつすら色づいた唇から紅茶の上品な香りが漂ってくる。

その心地よさに耐えきれず、魔理沙はそっと口付けた。

甘酸っぱくて、ぴりりと辛い、レモンジンジャーの香りがした。